

経済闘争、政治闘争、理論闘争の結びつき

一五七 エス・イ・グセフへ

レーニンからナツィアへ

1905年10月13日

親愛な友よ！ 職業的闘争にかんするオデッサ委員会の決議（「決議」第六か第五かはつきりしない。手紙第二四号にある。1905年9月の日付）は、私にはひどくまちがっているとおもわれる。私の考えでは、メンシェヴィキとの闘争に熱中していることが、いうまでもなく、こういう決議が出てきた当然の理由であるが、他の極端に陥るべきではない。ところが決議はまさに他の極端に陥っている。だから私はあえてオデッサ委員会の決議を批判的に検討したい。どうか同志諸君は私の意見を熟考してほしい。けっして言いがかりをつけたいので言うのではない。

決議には前文にあたる三つの部分（番号がついていない）と、五つの本来の決議部分（番号がついている）がある。第一の部分（前文のはじめの項）は、まったくよろしい。「プロレタリアートの階級闘争のすべての現れの指導」を自分で引きうけ、職業的闘争を指導する「任務をけっしてわすれない」。りっぱである。つぎに第二項、武装蜂起を準備する任務が「まっさきに」提起されており、また（第三項、つまり前文の終り）「そのため、プロレタリアートの職業的闘争を指導する任務は、不可避免的に後景に退く」。私の考えでは、これは理論的には正しくなく、戦術的には誤っている。

「武装蜂起を準備する任務」と「職業的闘争を指導する任務」という二つの任務を、あたかも同価値であり、同じ平面にあるもののように対照することは、理論的に正しくない。第一の任務が前景に、第二の任務が後景にあるという。——こうした言い方は、種類のちがったものを比較し、対照することを意味する。武装蜂起は、特定の時機における政治闘争のやり方である。職業的闘争は、労働運動全体の恒常的な現れの一つ、資本主義のもとではいつでも必要な、いかなる時機にもなくてはならない現れの一つである。エンゲルスは、私が『なにをなすべきか？』で引用したあるところで〔本全集、第五巻、390 — 392 ページ〕、プロレタリア闘争の三つの基本形態、経済的形態、政治的形態、理論的形態——すなわち、職業的形態、政治的形態、理論的（科学的、思想的、哲学的）形態を区別している。これらの基本的闘争形態の一つ（職業的形態）を、特定の時機の他の基本的闘争形態の事例と同列におくことがどうしてできるのか？ どうして、職業的闘争全体を一つの任務として、政治闘争のこんにちの方法、しかもけっして唯一のものではない方法と同列におくのか？ これはまったく矛盾したことであり、10分の1と100分の1を通分しないで加えるようなものである。私の考えでは、前文のこの二つ（第二と第三）の項は二つとも除去すべきである。「職業的闘争を指導する任務」と同列におくことができるのは、一般に政治闘争全体を指導する任務、一般に思想闘争全体を指導する任務だけであって、けっして、政治闘争や思想闘争のあれこれの、部分的な、特定の、現在の諸任務ではない。この二つの項に代えて、一瞬間も政治闘争をわすれたり、労働者階級に社会民主主義思想全般を教育することをわすれたりしてはならないこと、全一的な、真に社会民主主義的な労働運動を生み出すために労働運動のすべての現れのあいだに緊密な、引きはなすことのできない結びつきをつくりだすように努める必要があるのをわすれてはならないという指

示をいれるべきである。この指示は前文の第二項にしてもよいであろう。第三の項にしてよいのは、ブルジョアジーが熱心にひろめている、職業的闘争の狭い理解、狭い提起の仕方を警戒する必要があることを確認することである。もちろん、私はこのことについてとくに論じる価値があるかどうかという問題に触れているのでないから決議草案を提出しはしない。さしあたり、諸君の思想のどのような表現が理論的に正しいかを検討しているにすぎない。

戦術的には、いまのままの形の決議は、武装蜂起の任務をきわめて拙劣に提起している。武装蜂起は政治闘争の最高の方法である。プロレタリアートの見地からそれを成功させるには、すなわち、ほかのなにものでもなく社会民主党によって指導されるプロレタリア的な蜂起を成功させるには、労働運動のすべての側面をひろく発展させることが必要である。だから、蜂起の任務を職業的闘争の指導の任務と対立させることは大まちがいである。これによって蜂起の任務はひくめられ、細分される。労働運動全体を総括し有終の美をかざるかわりに、蜂起の任務の分離が生じている。職業的闘争一般にかんする決議（オデッサ委員会の決議はこのことについて書いたものである）と、オデッサ委員会のこんにちの活動における勢力配置にかんする決議（諸君の決議はこれに似ているが、それはまったく別の事がらである）という二つのことがまるで混同されているようである。

狭義の決議部分の番号のついた項にうつろう。

第一項について。「労働組合と結びついている」「幻想を暴露すること」……これはのけたほうがよいだろうが、まずどうにかがまんができる。第一に、これは、運動のすべての側面の引きはなしえない結びつきを指摘すべき前文のなかにはいつている。第二に、どんな幻想だか述べてない。もしこれをいれるとすれば、こう付けくわえるとよい——資本主義社会で、労働者階級の経済的必要その他の必要がみたされる可能性があるというブルジョア的幻想、と。

「それ（組合？）が、労働運動の終局の目標にくらべて狭いことを大いに強調して」……あらゆる労働組合は「狭い」ものである、ということになる。しかし、プロレタリアートの政治組織と結びついた**社会民主主義的労働組合**はどうだろう。重点は、労働組合が狭いということにはなく、この一つの（一つのであるから、そのかぎりでは狭い）側面を、その他の諸側面と結びつけるところにある。したがって、これを削除するか、でなければ、一つの側面と他のすべての側面との**結びつき**をつくりだし、つよめ、労働組合に**社会民主主義的内容**や**社会民主主義的宣伝**をしみこませ、労働組合を社会民主主義的活動全体にひきいれる必要があるということ、もう一度述べるか、どちらかである。

第二項について。よろしい。

第三項について。上述の理由により、武装蜂起という「もっとも緊切な第一義的な任務」を、労働組合の任務と比較対照するのは正しくない。職業的闘争の決議で武装蜂起を論じるのは意味がない。というのは、蜂起は「ツァーリ専制を打倒する」手段であって、それについては第二項が述べているからである。労働組合は、われわれがそこから蜂起のための力を汲みとってくる土台をひろげることができるであろう。だから、もう一度言うが、前者と後者を対立させるのは誤りである。

第四項について。「労働組合の問題で」「経済主義」にもどった「いわゆる少数派にたいして、強力な思想闘争をおこなうこと。」これはオデッサ委員会の決議としては、あま

りにも一般的ではないだろうか？ これは誇張した気味があるのではないか？ 印刷物上では、すべてのメンシェヴィキの「労働組合」にかんする決議など一つも批判されはしなかったではないか？ メンシェヴィキが法外に熱心にこの問題に夢中になる傾向があるのを自由主義者がほめていることが示されただけである。しかしそれから出てくる結論は、われわれが「適度に」熱心にやらなければならないが、かならずおなじように熱心にやらなければならない、ということだけである。私の考えでは、狭さを警戒し、労働組合の任務を歪曲しようとするブルジョアジーや自由主義者の傾向とたたかえという指摘にとどめて、この項をすっかり削除するか、でなければ、メンシェヴィキのなにか特定の決議に関連してこの項を別につくるか、どちらかである（私は現在このような決議のあるのを知らない、たぶんわが国の南部でなにかあるアキモフ的決議が現れたのであろう）。

第五項について。これが問題である。「可能ならば、指導」という言葉を、私は「および指導」に代えたい。「可能ならば」、私はあらゆることをしよう。ここに、そしてここにだけ、これらの言葉を挿入すると、われわれがあまり指導につとめないなどといったまちがった解釈を生み出すであろう。

私の考えでは、一般的に言って、この問題でのメンシェヴィキとの闘争を誇張しないように用心しなければならない。現在、ちょうど労働組合が急速に発生しはじめてらしい。必要なことは避けることではなく、なによりも避けるべきだと考えるきっかけをあたえるのではなく、参加し、影響をあたえ等々する努力をすることである。いま政治闘争ではひどくわずかしかやらないが、職業的闘争ではきわめて多くのことをやっている、初老の、家族もちの労働者の特殊な層があるではないか。この分野でのこの層の動きに方向をあたえるだけにして、この層を利しなければならない。ロシア社会民主党にとって重要なことは、まっさきに、労働組合のことを正確にうたい、この方面での社会民主党の創意と、社会民主党の参加と社会民主党の指導との伝統をすぐにつくりだすことである。もちろん、実際には力がたりないこともあるだろうが、それはまったく別の問題である。それに実際のところ、もし各種の力をすべて利用することができるならば、労働組合のばあいにもいつでもその力が見つかるであろう。労働組合について決議を書く力が、すなわち思想的に指導する力が見つかったのであって、ここに核心がある！

この手紙を受けとったことと、これについての君の考えを一筆知らせていただきたい。

エヌ・レーニン

ジュネーブからオデッサあて

第 34 巻『エス・イ・グセフへ』P394～398

ポイント

「武装蜂起」を「選挙闘争」におきかえてみよ！

「一瞬間も政治闘争をわすれたり、労働者階級に社会民主主義思想全般を教育することをわすれたりしてはならないこと、全一的な、真に社会民主主義的な労働運動を生み出すために労働運動のすべての現れのあいだに緊密な、引きはなすことのできない結びつきをつくりだすように努める必要がある」ことをはっきり認識して、労働組合のことを正確にうたい、この方面での社会民主党の創意と、社会民主党の参加と社会民主党の指導との伝統をすぐにつくりだすことである。